

事業計画

新しい所長、副所長のもとに研究所の設立理念を尊重し、基本構想の具現化に努め、関西文化学術研究都市の中核施設としての役割を果たすことを目指す。今年度から新しく取り組む重点事項をはじめ各事業計画は以下の通りである。

[1] 新しく取り組む重点事項

○若手研究員の採用

若手研究員の育成をはかるために、特別研究員を採用する。

○内外の卓越した研究者の招へい

内外の卓越した研究者を、招へい学者（IIASフェロー）として、1～2カ月程度の期間、招へいする。

○研究支援体制の強化

学術研究事務機構の充実・強化をはかるために、学術研究行政専門のスタッフを採用する。

○研究環境の整備

研究所の情報基盤を整備活用して高度情報化への取り組みを推進する。

○研究費確保のための公的資金の受け入れおよび民間寄付金のお願い、ならびに賛助会員の募集

研究助成機関等に働きかけ、研究資金の確保をはかる。

今年度は、企業等の協力を得て、賛助会員の募集に取り組み、研究資金の安定確保に努める。

○準備研究制度の実施

新しい研究課題について準備研究を行なう。

[2] 自主研究事業

以下の研究事業を推進する。

(1) 「人類の自己家畜化現象と現代文明」 ('96年度より継続研究)

人類進化の説明に使われる概念「自己家畜化現象」－人類が自らつくる文化的環境によつて自然淘汰から大幅に解放され、身体的にも独特の進化をとげたこと－を視点として、現代文明下での人類に課せられた課題を探求する。そのために多分野の研究者が参加して学際研究を行う。

○研究は、主として研究会を中心に展開する。

○11月頃に国内研究者を中心としたシンポジウムを予定している。

(2) 「生命体の多様性」 ('96年度より継続研究)

地球生命系を表現する実体として「生命体の多様性」を解析することを通して、その普遍性を追求することが出来るかを研究する。

○研究は、主として研究会を中心に展開するが、適宜外部から講師を招き、拡大研究集会に発展させる。

○12月頃、外国から研究者を招へいしシンポジウムを予定している。

(3) 「安全科学」 ('93年度より継続研究)

昨年度は、それぞれのサブグループの個別の研究のほかに、安全学概念の構築を検討した。今年度は、さらにサブグループで具体的な課題を追求するが、それとともに全体を総括する安全学に関して、第一期とも言うべき現在のチームによる、最終的な結論を導くことを目標に活動する。

1) 「生命・医療」サブグループ

・テーマ「医療における安全の追求はどこまで可能か」

・主としてインタビュー方式で展開

2) 「都市問題」サブグループ

・テーマ「知恵化時代の持続的な都市の姿」

・研究会方式とインタビュー方式の併用

3) 「国際政治」サブグループ

・テーマ「安全保障と地球環境問題の安全科学的定立」

・固定メンバーによる研究会を中心に展開

4) 総合関係グループ：全体を総括する安全学の構築

○各研究会の進捗状況など、インターネット上でメンバーの意見交換を行うバーチャル会議方式を引き続き採用する。

(4) 「複雑系の秩序と構造」 ('94年度より継続研究)

今まで、生命科学・物理学・経済学等の専門分野の異なる国内の若手研究者を中心にワークショップ(会期1週間を2回)を実施してきたが、今年度は「災害の科学」を研究テーマとして、①粉体流の統計物理学を用いた地震、崩壊、渋滞等に対するアプローチ、②反応拡散系に関する数理科学を用いた生態系、疫学、絶滅等に対するアプローチを試みる。

○国際ワークショップ(7月22日から8月5日)を開催し、研究成果のとりまとめを行う。

○ワークショップ期間中に、大学生を対象にした公開シンポジウムを予定している。

(5) 「情報論的転回」 ('95年より継続研究)

昨年度までの「科学論」中心の視点から、今年度は「存在論」中心の視点に転換し、研究テーマを「『情報負荷』概念と存在論の情報論的転回」とし、新たに研究メンバーの再編成を行い研究を推進する。

○合宿型の研究集会を開催し、最終成果のとりまとめを行う。

(6) 「比較幸福学」 ('94年より継続研究)

昨年度に引き続き、研究テーマ「現代社会における幸福の概念—日本社会とフランス社会との比較」のもとで、日仏両社会における様々な職業および年齢の男女から聞き取り調査(インタビュー方式)を実施し、幸福の概念の分析・比較と、研究成果のとりまとめを行う。

○研究会は、外部講師の招へい、聞き取り調査を主に行う。

○フランスでの調査を実施する。

(7) 「社会情報学」 ('95年度より継続研究)

研究テーマを「プログラム科学としての社会情報学」とし、これまでの研究で明らかになった「社会科学における最初のプログラム科学」という社会情報学の性格規定をめぐって、科学としての社会科学が依拠すべき社会現象の「秩序原理」に関し、法学、経済学、経営学、社会学、社会心理学、文化人類学、科学哲学などの多分野にわたる学際的な検討を行う。

○研究会を活発に開催し、年度末には成果のとりまとめを行う。

(8) 「わざ学」 ('95年度より継続研究)

昨年度に引き続き「わざ」の理論的研究を進め、研究テーマを「『わざ』と身体」とし、より具体的に「わざ」のあり方とむすびつけながら展開する。

- 研究会と合わせて公開イベントや「わざ」の現場見学も組み込む。
- 研究成果のまとめは、活字のみでなく映像化などの方法を検討する。

(9) 「言語の脳科学」 ('97年度より新規研究)

言語心理学、神経心理学、発達心理学、認知科学などの研究を背景に言語処理の脳内メカニズムに関するモデルを構築することを目的に、

①概念形成と命題過程、②文法獲得と利用過程、③意味理解の過程の3つのテーマについて研究する。

- 研究会を中心に推進し、11月頃には外国からの研究者を招へいした研究集会を開催する。研究成果の報告集を出版する。

(10) 準備研究

今年度から新たに、準備研究制度を設け、以下の課題について研究の方向を探ることを試みる。

- 1) 「20世紀の『生物研究』から21世紀の『生命研究』を考える」
- 2) 「21世紀の法モデル」
- 3) 「科学の文化的基底」
- 4) 「環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から」
- 5) 「生命と数理のインターフェイス」

[3] 共同研究

京都大学数理解析研究所との共同研究を、「財団法人国際高等研究所と京都大学数理解析研究所との共同研究事業に関する協定書」('97年4月1日締結予定)により実施する。

[4] 受託研究

昨年度の研究成果をふまえ、引き続き宇宙開発事業団より「JEMの人文社会的利用法に係わる調査研究」に関する受託研究を行う予定。

注) JEM: 宇宙ステーション取り付け型日本実験モジュール (軌道上研究所)

[5] 特別研究「沼記念プロジェクト」

故沼正作京都大学医学部教授の研究業績を讃えた特別研究として、(株) 島津製作所から研究資金ならびに研究施設の提供と支援を受けた冠研究である。'92年10月より開始、今年9月末で終了する。年度内に研究成果に基づく記念行事の実施を予定している。

専任の若手研究員3名、研究補助員3名の研究体制を組み、生物の個体発生、器官の分化、生体の恒常性維持や学習、記憶などの高次神経活動の機構を分子レベルで明らかにすることを目指す。

研究テーマは、①脳神経系におけるカリウムイオンチャンネルの構造解析と機能調節機構の解明、②マウス筋性アセチルコリン受容体遺伝子 γ (ガンマ) および ϵ (イプシロン) サブユニットの標的変異を使った機能解析、③ホルモン遺伝子の発現調整に関与する因子群の単離とそれらの相互作用の解明の3つである。

[6] 学術講演会、一般公開講演会などの開催

内外の著名な研究者の講演会を開催する。併せて学研都市内の研究機関との交流をはかる。

[7] 少年少女サイエンス・スクールの開催

21世紀を担う子供達(小学生5年・6年)を対象に、著名な研究者との触れ合いを通して創造性と科学への夢を育むことを目的に、'94年より開催している。

今年度は10月11日・12日の両日に亘る一泊二日を予定し、研究所隣接の木津川台住宅の住民の方々の協力を得てホームステイを実施する。

[8] 学術情報出版・広報活動

IIAS Reports等の研究成果の出版を積極的に推進する。併せて高等研の学術情報システムの構築を目指す。

研究所の活動を内外に広報するため「こうとうけん」「ニュースレター」等を定期的に発行する。